「それ差別やで、あかんで！」と言える人に

木ノ本子ども会　西畑　徹

子ども会の目的は、子どもの健全育成はもちろんのこと、部落差別をはじめとするあらゆる差別・人権問題の解決のために、集団活動を通して人を思いやる心、助け合いの精神、差別を見抜き解決する力をつけることです。また、たくましく生きるための力（学力）をつけることです。

私が子ども会と関わるようになってから25世紀が過ぎています。子どもの頃は近所に隣接した集会所に毎週水曜日の夜に集まり、みんなと遊べることが楽しくて、欠かさず参加していたように思います。高校生の時、クラブ活動に夢中になり、子ども会から遠ざかっていた時期もありましたが、今となっては切っても切れないのが子ども会との縁です。子ども会活動を通してお世話になった人、よき理解者、差別をなくすために共に闘う仲間との出会いがあったからだと思います。子ども会というのは、子どもの成長を見守るのでは、大人（指導者・保護者）も育まれるところであるとつくづく思います。

一度出会うと、つながりができます。そして共に活動することで分かり合い仲間・理解者となっていきます。反対に、差別は無関心・忌避（避けること）・囲い込み・排除するところから生じます。子ども会活動を通して、人とつながることのすばらしさを伝えていこうと思っています。

現在は、子どもの貧困、低学力、不登校、子どもには見聞・想像できない深刻な問題もあり、少しでも解消するように学校と連携しながら取り組んでいます。

一方で部落問題を正しく理解できていない人たちによる差別が横行しています。

ネット社会の中では、差別的な書き込みや「部落探訪」と称して被差別部落を暴くような動画が投稿され、行政がプロバイダーに削除要請を行っても、後を絶たません。

子ども会では子どもたちが差別に気付き、なくしていく人になってほしいという思いで、子どもたちを育ててきましたが、根本は、差別する側と問題があるのであって、差別する人がなくなれば差別は解消するということです。

地元の会議や人権教育講演会において年配の方々からは、「私らは差別をなくしたいから何度も研修会に参加してきた。でも、本当に参加せなあかんのは、周りの人と違うんかい？」「わが子を差別者にしないために、親がしっかり勉強して人権意識を高めてもらわんとあかんやろ。」こういった心からの叫びを聞きます。その過程で、子どもたちが大喜びで私が学校へ行く時に会うと「さっちゃーー！ん、今日はまちジョ？めちゃ楽しみにしてるで！ーーー！」とたくさんの子どもが寄ってきてくれたり、自分の担任の先生がくじで当たるとそのクラスの子どもたちが大喜びする声が放送室まで聞こえてきます。終わった後もきっちゃーん」と近寄ってきてくれる子どもが増えました。

たくさんに、学校外でもあいさつのきっかけにもなり、地域のコミュニティの中にもなってくて思います。きっかけを持つことで信頼感や安心感が生まれ、絆かと繋がる絆となり、地元愛にもつながる様っことなっていったらいいなあと思います。

私も今そんな体験をしているところです。私は、和歌山ラプでこれからもいろいろと活動しながら地域を盛り上げたい地元が好きや一の子どもたちをふやしていけたらなあと思います。

心豊かな暮らしをクリエイティブしよう

被差別の人は少数です。差別の解消は、周りの多数の人の人権意識・態度にかかっています。研修会に参加したり、自ら勉強したりして、部落問題を正しく理解し、その日がくるときにきちんと対応できる人になってくれることを心に願っています。

昨今、部落問題を知らずに、学校の先生にたったちも少なくありません。解放運動の歩み、差別の実態を認識しようとして、子どもたちを見抜き、許さない心情・態度を育んでいただきたく思います。

「それ差別やで、あかんで！」と言える人に。

心豊かなくらしをクリエイティブしよう

八幡台小学校PTA会長　佐竹　幸

私は昨年度アートを通したコミュニティの場を作りながら「みんなちがってみんないい」というコンセプトを中心に地域活性化や子どもたちから高齢者まで、心豊かな時間を共にクリエイトしていけたらと活動しています。

私自身、PTAに関わって約10年。子どもたちや先生や保護者と信頼関係を深めていくにはまず接点を作ることかなあと思い、子どもたちに出来る事として、アートコミュニティの体験の場などを企画してきました。

特に夏祭りでの「八幡台きもだめし」は放課後に子どもたちにきもだめしで使う準備品（怖い絵や工作など）を創作したい人を募集するというも100人くらい集まり、「怖いやろ！」「これは気持ちぶ悪いで！」「こんなんやってええんかな？」などと言いながら登校日にセッティングし、当日は自分たちで作ったきもだめしをワクワクドキドキしながら待つ子どもたち。創作から関わることできもだめしにも興味を持ち自主的に楽しんで活動するきっかけにもなったことはアートコミュニティショップの時間がいきっかけになった事と思います。

しかし、コロナ禍でそういう夏祭りの場も減る団体で行動することに制限がかかる中、人とのコミュニケーションのむずかしさを知り、今までのやり方では何もできない事に気づきました。

何かその中でも出来ることはないかと運動会の時に子どもたち一人ずつに描いてもらった未来の自分へのメッセージつきの校顔絵フラッグアート。運動会の時にそれを結びつけて校舎と校舎がつながり青空のの500人以上の子どもの似顔絵と共に風にゆれる旗を見たときはとてもたが勇くなりましたと方法を変えれば笑顔になることが出来る、一つの大きいものものを作れるんへ。

そんなな、クラスに寄った時、ぴつくりしたことがありました。

給食を熱って一人で食べている姿。仕方ないとは言えど、親ながらなんかなあと思ったことがきっかけで校長先生に相談し、「はそうジ」を4月から毎月スタートしました。担任の先生の中から毎回くじでゲストを決めながら先生たちへのリクエストや質問時を設置して、子どもたちにも参加してもらいながら放送を継続しています。私自身先生との距離感が縮まったし、子どもたちが大喜びで私が学校へ行く時に会うと「さっちゃーー！ん、今日はまちジョ？めちゃ楽しみにしてるで！ーーー！」とたくさんの子どもが寄ってきてくれたり、自分の担任の先生がくじで当たるとそのクラスの子どもたちが大喜びする声が放送室まで聞こえてきます。終わった後もきっちゃーん」と近寄ってきてくれる子どもが増えました。

たくさんに、学校外でもあいさつのきっかけにもなり、地域のコミュニティの中にもなってくて思います。きっかけを持つことで信頼感や安心感が生まれ、絆かと繋がる絆となり、地元愛にもつながる様っことなっていったらいいなあと思います。

私も今そんな体験をしているところです。私は、和歌山ラプでこれからもいろいろと活動しながら地域を盛り上げたい地元が好きや一の子どもたちをふやしていけたらなあと思います。

心豊かな暮らしをクリエイティブしよう

「地域の子どもは、地域で守る！」

木本・松江地区子どもを育てる協議会　会長　尾前　真一

日頃は、地域の子どもたちの安全と健全育成のために協力賜り、厚くお礼申し上げます。

さて昨年10月に、県教育委員会が、文部科学省の「児童生徒指導行動調査」の結果を基に、県内の状況を公表しました。

2022年度の和歌山県内公立学校の不登校者数は、小学校が654人（1人当たり15・3人）、中学校が1164人（55・3人）いずれも年連続で過去最多を更新し、小学校の不登校者数は5年前（17年度）の3倍となりました。高校でも増加している状況で、前年度より84人多いうち76人が4年連続で増えている状況です。

不登校者数の増加について長教委は、新型コロナウイルス対策により、生活のリズムが乱れやすかったこと、学校生活でさまざまな制限があって交友関係を築くことが難しかったことや、登校意欲が湧きにくい状況があったことなどを挙げられています。

県内公立学校の不登校者数（人）

〈 〉内は千人当たりの不登校者数

年度	小学校	中学校	高校
2017	218 〈4.8〉	704 〈30.8〉	419 〈18.6〉
2018	262 〈5.8〉	751 〈34.2〉	397 〈18.4〉
2019	294 〈6.6〉	812 〈38.4〉	398 〈19.2〉
2020	367 〈8.3〉	849 〈40.0〉	421 〈21.4〉
2021	587 〈13.6〉	1007 〈47.3〉	492 〈26.0〉
2022	654 〈15.3〉	1164 〈55.3〉	576 〈31.7〉

（紀伊民報　2023年10月5日付）

不登校に対する理解が広がってきていることも要因にあると考えられます。県教委は学校に対し、不登校対応のマニュアルなどの活用徹底を呼びかけたり、不登校に特化した管理職研修を開いたり、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーの配置を進めたりしているのが現状であります。

また、暴力行為は小学校が95件（10件減）、中学校が225件（42件増）、高校が33件（6件減）で、器物破損や生徒間暴力が多くなっている状況にあります。

多様化する社会の中で、子どもたちは様々な課題に直面しており、学校、保護者、地域が二位一体となり、「地域の子どもは、地域で守る！」という前提のもとに協働していきたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

3年間を振り返って

松江地区交通指導員　田村　耕作

松江地区交通指導員は、現在二人で活動を行っています。

主な活動としましては、松江小学校児童の登校に合わせて、交通指導、地域内の各種行事や市等が行う行事における周辺の交通事故防止に努めています。

また、松江地区には、「松江地区お帰りパトロール隊」があり、「お帰りパトロール隊」と協力のうえ、下校時も交通指導を行っています。

しかし、私の場合は仕事の関係上見守りができないことが多々あります。そんな中でも事故のない住みよい地域にしなければと思い頑張っているのです。

交通指導員なって三年になりますが、子どもたちの表情は、日々変化があり楽しく活動をさせていただいています。

春先は、特に一年生は学校へ行くことに自体緊張しているのが手に取ってわかります。

しかし、一か月もすると、学校生活にもなれ、登下校時は笑顔もみられることが多くなってきます。なかには「おっちゃん、今日学校でこんなことあったのよ」と教えてくれる児童もいます。

しかし、大人も一緒だと思いますが、気のゆるみが、事故のもとになることもあるので、子どもたちの行動には重要注意をしています。

休み明けや、雨の日、冬場は表情も硬く、足取りも重く感じます。

中・高学年の子どもたちは、自分たちの生活ペースがあるのかマイペースで登下校を行っていますが、学校行事があるときは、日ごろの表情とちがいます。運足の日、運動会日など大きな行事があるときは、大変元気で、足取りも軽く楽しそうに登校しています。

特に、金曜日や夏休み前の日の下校時は日頃より足取りも軽く、軽快に下校しています。

しかし、イベントが終わってしまうと、表情も足取りも変わってしまいます。

子どもたちの色々な表情をみながら、子どもたちが、安心安全な生活が送れるように今後も見守っていきたいと思います。

令和五年四月一日より、道路交通法が一部改正され、自転車に乗る際ヘルメット着用が努力義務になりました。

まだまだ全国的にも、ヘルメット着用率はあまりよくないようです。

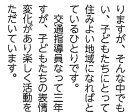
自転車は、とても便利な乗り物ですが、事故をしてしまうと、大きな後遺にもつながります。

ひとりでも事故のないようにしていただきたいと思います。

また、和歌山県では、「サインプラス・サンクス運動」を推奨しています。

この運動は、横断歩道を渡るときに歩行者が手を上げる（サイン）などをして、運転者・横断する歩行者を明確に伝えることに加えて、停止してくれた運転手に対し「ありがとう」（サンクス）の気持ちを会釈などで伝えることで、運転手に横断歩行者保護の意識を向上させ、横断歩行における事故を抑止することを目的とした運動です。

ひとりひとりが気を付けて、住みよい交通事故の無い地域にしていきましょう。



『生徒指導提要改訂に伴う生徒との向き合い方について』

和歌山市立河西中学校
生徒指導主任　草田裕基

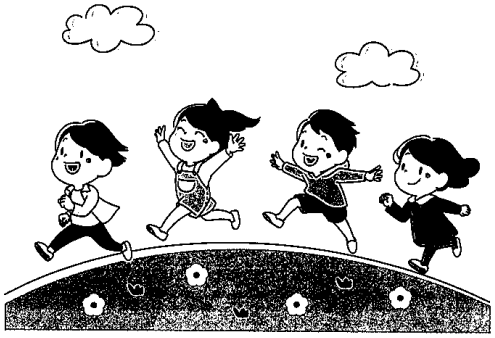
子どもたちを取り巻く環境が複雑で、多種多様な課題が多くなっている。何よりも子どもたちの命を守ることが重要であり、すべての子どもたちに対して、学校が安心して楽しく通うことができる環境となるべきである。生徒指導の体制をチーム学校として取り組んでいくことが非常に大切であると考える。様々な課題に対して担任や生徒指導担当だけでなく、ＳＣやＳＳＷとの連携を図りながらその生徒に対して多角的視点からの正確なアセスメントを考え、実践していく。また外部機関との連携も図り、専門的な視点からの助言やサポートを受けることで、多様な背景を持つ生徒に対しても指導や支援を行うことができると考える。

○いじめ対応について

毎月第一水曜日にいじめなくそうデーと定め、いじめについて考える時間を取っている。いじめなどトラブルが発生するきっかけとなることが多いのがＳＮＳ上である。そのためいじめなくそうデーの時間にＳＮＳトラブルについて考えたり、外部機関の相談窓口についての案内を紹介したり、講師の先生を招聘し情報モラル教室を行うなど対応を取っている。これらのことが、生徒一人ひとりがいじめをしないという態度を身につけさせている。また実際にいじめを受けている生徒に対しては助けを求められる方法を促し発達支持的生徒指導を行っていく。これに加え、各学期にいじめアンケートを実施している。いじめの認知率を高め早期発見、早期対応につなげている。このアンケートを基に教育相談を行っている。担任が生徒一人ひとりと向き合う時間を確保している。その中で出てきたいじめの被害や、周りのクラスメイトがいじめを受けているなどの情報があれば、学年間で共有していじめ対策委員会で今後の取り組みについて協議していく。ＳＣやＳＳＷを交えてアセスメントを考え、被害生徒のニーズを確認し、加害生徒に対しての指導を行う。関係生徒の保護者に対するきめ細やかな連絡や相談を行う。問題に応じて警察などの外部機関に連絡し、組織的な指導や支援を行い迅速に対応しいじめの解消へとつなげていく。

○不登校対応について

不登校の背景にある要因を多面的かつ的確に把握し、早期に適切な支援につなげる。そのために担任だけでなく学年間で情報共有し、不登校対策委員会で協議していく。本校ではサポート室という名の別室教室がある。安心して学校に来ることができる場所、その生徒自身がステップアップできる場所として設置している。不登校気味の生徒や集団適応が苦手な生徒を対象とし、教員だけでなくＳＳＷやＳＣなどと連携を図りながらサポート室に登校している生徒と関係を築いている。そうすることによって生徒の変化に気づき、情報を共有することでアセスメントを考え、個々の状況に応じた学びを保証する支援を行っている。



〝朝のあいさつ運動〟から思うこと

松江地区地域安全推進員会
会長　南出一夫

松江地区地域安全推進員会は、数年前から毎月第1月曜日から金曜日の一週間河西中学校で実施している「朝のあいさつ運動」に参加させて頂いています。朝の登校時間帯の約30分間ですが、校長先生をはじめ、生徒指導の担当先生やPTAの役員さん、生徒会の皆さん等、総勢15名位で登校時の生徒を校門で迎えています。

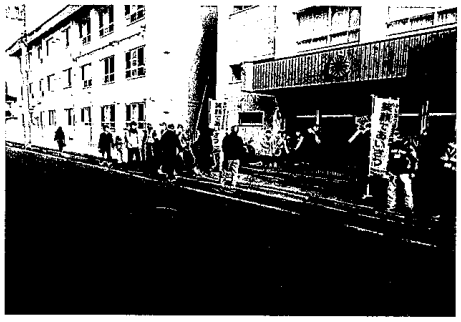
参加当初は『おはようございます』と言っても反応が無かったり、目も合わせない生徒が多かったが、続けているうちに、生徒の方から『おはようございます』と挨拶されたり、目と目が合い、声も大きくなってきた感じがします。

又、挨拶代わりに校長先生や生徒指導の先生と〝ハイタッチ〟する生徒も居て、先生たちも快く応えてあげている。この姿は、先生と生徒の距離感が無く、『今日も一日よろしくお願いします』、『ガンバレヨ！』との挨拶に私の眼には映り、微笑ましく感じる瞬間であり、〝あいさつ運動〟に参加してきて良かったと実感しています。

さて、学校で〝朝のあいさつ〟が出来ていますが、地域やご家庭ではどうでしょうか。『行ってきます！』『行ってらっしゃい！』、『ただいま！』『お帰りなさい！』と地域や親子・家族間での『あいさつ』は、習慣づいていますか？

自然と挨拶を交わせることは、社会人になっても、意思の疎通を図る上での基本であり、不可欠な行為であると思います。

私事ですが今、社会人一年生と大学生の二人の孫が居ます。自然と〝あいさつのできる人間〟へと習慣づくように心掛けている次第です。

河西中学校の生徒が成長する過程で、笑顔で自然と〝あいさつができるように〟と思いながら、〝河西中学校のあいさつ運動〟には今後も参加させて頂きたく思っています。

以上